れいわ・木村英子議員インタビュー

偏見や差別 被告だけじゃない

事件が繰り返されないためには――。「重い身体障害で暮らした、れいわ新選組の木村英子参院議員（54）

〈前列で被告は「重度障害者がお金と時間を奪っている」などと語った〉

「施設で公園で 私も浴び続けた排除の視線

障害ある子の誕生 祝福される社会を望む

写真は朝日新聞 3 月 10 日朝刊。心にせまるインタビューを抜粋して紹介。

私は生後 8 カ月のときに歩行器ごと玄関から落ち、首の骨が曲がる大けがをして重い身体障害を負いました。小学 5 年から中学 3 年の 5 年間を除き、18 歳までの大半を施設で暮らしました。入所は親が決めました。私に医療や介護を受けさせたいという責任感と、施設に預けなければ家族が崩壊しかねなかった現実からです。私には 24 時間の介護が必要です。親は疲弊し、一家心中をしようとしたことも何度かあった。親が頼れるのは施設でした。やさしい職員もいましたが、私にとっては牢獄のような場所でした。施設が決めた時間に食事してお風呂に入って、自分の暮らしを主体的に決めることがない。食事を食べさせてもらえないことも。一番嫌だったのは「どうせ子どもを産まないのに生理があるの？」という言葉です。全ての施設がそうとは思いませんが、私がいたのはそういう施設でした。

自由のない環境で希望すら失い決まった日常を過ごす利用者を見た人たちが「ともに生きよう」と思えるでしょうか。偏見や差別の意識が生まれたとしても不思議ではありません。私が望むのは、障害のある子どもが生まれたとき、「おめでとう」と言える社会。私は親から施設に捨てられた、歓迎されない命だという思いを抱いて生きてきました。歓迎されない命などない、と気づいたのは 19 歳で地域に出てからです。

23 歳で結婚し、息子を出産しましだ。不安だったのは、子どもをかわいいと思えるかでした。母に抱かれた記憶があまりない私は、母に対する愛情が持てなかった。でも出産した時は、子どもへのいとおしさがこみあげました。公園デビューをしたときのことです。息子と子どもたちが砂場で遊んでいるのを、車いすに乗った私が近くで見ていました。私が母親だとわかった瞬間、周りのお母さん方が自分の子どもを抱き上げて帰ってしまった。私と関わると厄介なことになるといった意識が働くのでしょう。本人たちは差別とは思っていませんが、あからさまな差別です。障害のある人とそうでない人を分けることによってお互いが知り合う機会を奪われることから差別は生まれます。社会から排除することそのものが差別なのです。

地域で暮らして 35 年。福祉サービスは増えましたが、重度訪問介護が就労中などに公的負担の対象外だったり、移動支援が自治体により差があったり。普通学校への入学が障害を理由に認められない例もある。こうした課題をみんなで解決できたとき、障害のある子が生まれて「おめでとう」と言える社会になる。それが事件を乗り越えることになるのではないでしょうか。

（2020 年 3 月 13 日）